文学部 125 年記念企画展

語り出す南洋の造形

慶應大所蔵・小嶺磯吉コレクション

2015年1月9日〜2月7日　慶應義塾大学三田キャンパス図書館 1F 展示ギャラリー

ご挨拶

　文学部創設 125 年記念企画展「語り出す南洋の造形」にようこそおいでくださいました．本企画展は，文学部民族学考古学専攻の保管する貴重な民族資料の中から，南洋の島々に生きる人々の力強い息吹をお伝えするものです．文学部は 1890 年に，この三田の地に理財科•法律科とともに慶應義塾大学部文学科として創設されました．この 125 年，日本の近代的平和国家への歩みの中で慶應義塾の果たした役割を考えるとき，私たち文学部がその豊富な学問領域のすべてにおいて，多様な価値へのきめ細かなまなざしを丹念に積み上げてきたことに気づかされます．本企画展はまさにこの文学部の伝統にまっすぐ連なる展示であり，今年 2015 年に予定される創設 125 年記念事業の第一弾の取り組みとして，自信をもって皆さんにお勧めできる内容となっています．私は本展示の一つ一つの造形に込められた原初の生のエネルギーが，ご覧になる皆さんの感性を圧倒的な迫力で揺り動かすものと確信しています．

　本展示は文学部の民族学考古学専攻教員を中心に進められましたが，美学美術史学専攻，図書館•情報学専攻，さらにはメディアセンターなど多くの専攻や部門の協力の賜物であります．また，この準備のために，民族学考古学の講座を受講した学生たちの熱心な参加があったことも特記したいと思います．こういう広範な力の結集にこそ，文学部の誇る伝統が息づいていることを強調して，私のご挨拶に代えさせていただきます．

2015 年 1 月

慶應義塾大学文学部長　関根　謙

はじめに

慶應義塾には，メラネシアの島々で蒐集された民族資料が 1800 点余りある．主たる資料は，戦前・戦中に南洋群島で製糖業を展開していた南洋興発株式会社の社長，松江春治氏のコレクションであった．慶應の民族学研究を主導した松本信廣先生が中心となり，コレクションの図録として昭和 15 年（1940）に『ニューギニア土俗品圖集』が刊行されている．松江氏のご子息が塾生だった縁もあり，終戦直後に三田キャンパスで所蔵されることとなった．以来，民族学考古学研究室が管理している．

この企画展では，その中から小嶺磯吉氏によって蒐集された資料を展示する．小嶺氏は長崎堂前の生まれで，明治 23 年（1890）にトーレス海峡の木曜島に渡り，真珠貝潜水漁に従事した人物である．明治 35 年（1902）に独領ニューギニアのビスマルク群島に移ってからは，貿易や造船業，コプラ・プランテーションによって財をなした．ニューブリテン島，ニューアイルランド島，アドミラルティ諸島での商売のかたわら，さまざまな造形物を蒐集したことでも知られている．20 世紀初頭は欧米各地で博物館の設立が相次いだ時期で，この海域でも「珍奇」な造形物への関心が高まっていた．商才に長けた小嶺氏のことだから，商売の可能性を蒐集品に感じ取っていたにちがいない．昭和９年（1934）に 69 歳で亡くなられた後，その頃ニューギニアへのビジネス拡大を模索していた松江氏が蒐集品の存在を知り，その散逸を惜しんで３百点余りを一括購入した．松江コレクションの中に小嶺資料が含まれていた理由はここにある．

メラネシア民族資料の一部は，戦後２度ほど展覧会に出品された．読売新聞社主催の『文化人類の宝庫・ニューギニア芸術展』（昭和 37 年，上野松坂屋）と，サントリー美術館の『原始美術』（昭和 50 年）である．しかし，それ以降は収蔵庫で眠ったまま長い年月が経ってしまった．そこで，近森正先生（名誉教授）による基礎的整理作業を継承し，民族学考古学専攻生・大学院生の時どきの協力と文学部からの資金援助を頂きながら，近い将来の公開を目標に 10 年近くに亘って，資料の確認と保管処理を進めている．平成 24 年（2012）には，日吉駅西側の旧 KBS 棟（慶應ビジネススクール）が西別館として再整備されて，民族資料用の収蔵スペースをそこに確保することができた．その一角は調温調湿室として改修され，重要資料の管理体制に加えて保管環境も格段に改善している．

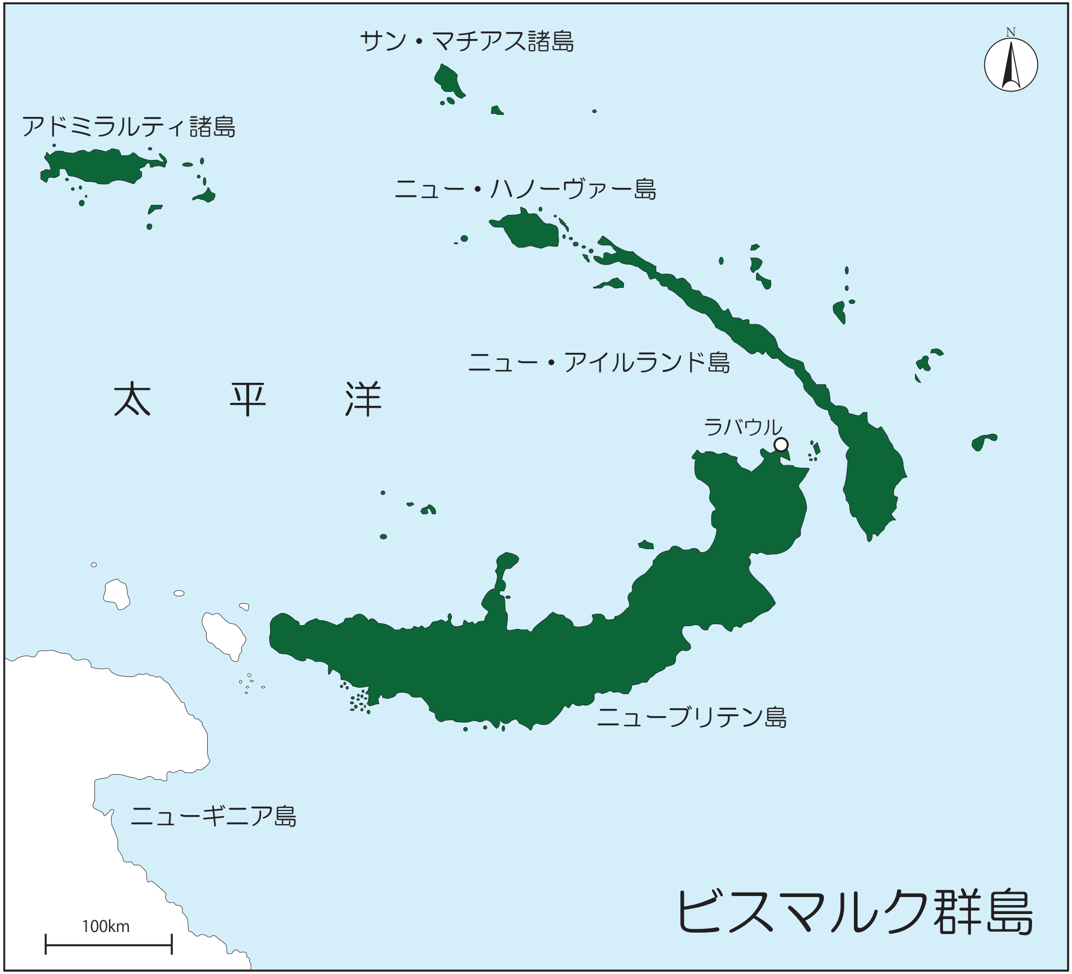
最後に展示作業に触れておきたい．私たちの専攻では，学部生対象の導入科目として「民族学考古学研究法」を設置している．秋学期には専攻所蔵資料の展示実習を行っており，今回はその４回目にあたる．受講生らとともに数ヶ月の検討を経て，小嶺資料から１８種類 49 点の造形物を選び，観察表の作成や文献調査を進めてきた．展示構成はもちろん，本冊子の資料解説一つ一つがその成果である．折しも，文学部は開設して 125 回目の年を迎える．その輝かしい幕開けとして，相応しい企画展になったのではないかと思う．

2015 年１月

民族学考古学専攻 教員一同

【小嶺個人史】

1866：肥前島原の堂前村生まれ．
1890：トーレス海峡の木曜島に渡り，真珠貝採取船の労働者となる．すぐに小帆船を借りて，真珠貝採取業に従事．
1895：プランテーション適地を探して，ニューギニアのフライ川とビナツリ川の遡上探検を実施．
1901：オーストラリア北東岸ケアンズ近郊にサトウキビのプランテーションを購入する資金を日本から調達．しかし，オーストラリアの市民権を得られず事業を断念．失意の中，独領ニューギニアを経て日本に一時帰国．
1902：スクーナー船の船長としてニューブリテン島のヘルベルトショーへ（現ココボ）に到着．ドイツ総督のアルベルト・ハールに雇われ，ニューアイルランドやアドミラルティ諸島の武装解除の任に就く．
1902～1912：ヘルンシェイム商会の仕事を断続的に請け負い，アドミラルティ諸島に交易所やプランテーションを設立．
1903 年頃：ニューアイルランドのナマタナイ (Namatanai) に支庁を設けるため，ハール総督に同行．
1904 年頃：ナマタナイ沖合にあるタンガ諸島で部族間の紛争に介入し，和平を成功させ，大量の槍を没収．
1909：アドミラルティ諸島で現地住民に奇襲される．次の年，マヌス島の西端で現地従業員 7 名が殺害されている．
1910：アドミラルティ諸島で 1000 ヘクタールの借地権を得る．
1911：真珠貝採取の許可を取り付け，同年にはラバウルに商売を広げる．
1912：神戸に，ドイツ・ニューギニア小嶺商会を設立．熊本県人 5 名が移民として渡航．1913 年（大正 2 年）4 月までに 150 数名の移民を送ることに成功．
1913：ヘルンシェイム商会への返済義務違反で小嶺の逮捕命令が出されそうになり，ほとぼりがさめるまで日本に帰国．上村大将や松方老公の後援をえて，辻新次男爵らから融資を受けてニューギニアに帰還．
1914：第一次大戦が勃発し，ラバウルをはじめ旧独領ニューギニア一帯は混乱．小嶺は邦人 200 名と現地住民 1500 名を率いて日本人自警団を組織．ラバウル市内ならびに近郊の治安維持にあたる．
1914：オーストラリア軍に加担して，ドイツ警備艦コメット号の捕縛を手助けする．
1919：現地の土地 1050 ヘクタールを確保し，その内 750 ヘクタールで換金作物を栽培．純資産は 70000 ポンドに達する．1920 年には，ラバウルでもっとも裕福な人物となる．
1934：不況の波にもまれ，打ち続く欠損に事業整理の途上，同年 10 月 3 日，69 歳の老齢でラバウルにて長逝．10 月 4 日，在留邦人，諸外国人，現地住民が多数参列し，棺上は日豪両国旗で覆われ盛大な葬儀が営まれる．
1935：小嶺磯吉氏の蒐集した旧独領ビスマルク群島，ソロモン諸島，東北ニューギニア地方の土俗品の散逸を憂いて，南洋興発株式会社社長の松江春次氏が一括購入．



【ビスマルク群島】

小嶺磯吉氏が商売のかたわら民族資料を蒐集したニューブリテン島・ニューアイルランド島・アドミラルティ諸島の島々をまとめてビスマルク群島という．北部ソロモン諸島ブーゲンビル島とともに 1884 年から 1914 年までドイツ領だったことから，旧独領ニューギニアとも呼ばれる．火山起源の急峻な地形と熱帯性気候を特徴とする．島の人びとが生み出してきたさまざまな造形物は，西欧との接触以来「珍奇」なものとして個人コレクター，博物館によって蒐集の対象となった．ニューブリテン島は秘密結社を連想させる造形物を，ニューアイルランド島はウリ像やマランガン像などの祖霊像を特徴とする．アドミラルティ諸島のなかでもロウ島とパム島は先史時代より黒曜石の産地だった．

（佐山のの）

【木製祖霊像（uli）】

・資料番号：1, 2, 3
・サイズ（高さ）：150 cm 前後
・蒐集地：ニューアイルランド島中部マダック地区

顎鬚を蓄えた大顔や頭上の髪飾り，どっしりと踏ん張る短脚は，間違いなく「ウリ」と呼ばれた祖霊像の特徴である．キョウチクトウ科の高木から彫り出された一木造で，タカラガイの殻とサザエの蓋で眼球が表現され，赤土（赤）・木炭（黒）・石灰（白）とパリナリウムの樹脂を混ぜ合わせた３種類の顔料で彩色されている．突き出るペニスとふくよかな胸が示す両性具有性は，戦場での無慈悲なまでの力強さと人々を養い立てる甲斐性を象徴するという．どちらも首長に不可欠な資質だったようだが，詳細は不明である．ウリにかかわる知識は，マダックの山深い内陸で伝えられてきたが，植民地化の過程で村々が廃れてしまったからである．1904 － 5 年に東海岸のラマサンで行われた首長の葬送儀礼（マランガン）に際して，名を残した首長たちを象徴するように，10 体のウリ像が内陸の民によって運び込まれたことが僅かに知られている．そのなかには，慶應大所蔵の３体にそれぞれ似たウリ像が含まれていた．（山口徹）

【木製祖霊像 (malangan)】

・資料番号：4, 5
・サイズ（高さ）：（4）127cm，（5）123 cm
・蒐集地：ニューアイルランド北部

葬送儀礼で故人を表象するために作られた一木造の彫像である．白を基調に黒と赤の顔料で彩色されており，目には貝，髪にはココヤシの繊維が使用されている．展示資料のどちらにも広葉樹の葉の文様が全身に描かれ，鼈甲細工付き貝製ディスク（カプカプ）の意匠が胸部に見られる．一方の像には鮫や鳥が彫り出されている．下部に見られる黒い鳥は，精霊信仰の対象とされるトーテム動物，オウチュウを表している．他方の像には，パンダナスの葉で編んだ女性用帽子に加えて，乳房などの性表現が見られる．口から帽子まで突きあがる長い舌や露出する肋骨によって異形の印象が増している．複雑な造形を丸太から彫り出すには，鉄製の道具が使われたと考えられる．

（中島舞，船橋卓真）

木製祖霊像（ウリ）：資料番号１（中央），２（右），３（左）

【絡み合いが生み出したマランガン造形】

マランガン彫像を製作することは，当地の人びとによって「皮膚をつくる」ことに喩えられる．人は皮膚を重ねて成長する．系譜関係や個人の資質によって獲得した権威や権利が時どきの皮膚に刻み込まれる．マランガン彫像の多様な構成要素は故人が獲得してきた権威や権利の証であり，古いものから新しいものまで幾重にも重なる皮膚を透き通って身体の表面に浮かび上がってきた意匠なのである．葬送儀礼は故人に帰属していた諸権利を残された者たちへ再分配する場であり，縁故者らは彫像の外観を記憶することで継承の正当性を主張できるようになる．マランガン彫像は言うなれば，死する者と生きる者を取り結び，生きる者たちの社会関係を再構成する媒体ということになる．ただし，その製作の現場にはもう１つの強力な作用が働いていた．19 世紀末から 20 世紀初頭に蒐集されたマランガン彫像の意匠は特に多様である．西欧から持ち込まれた鉄製加工具によって複雑な造形が可能になっただけでなく,「異形」を求める欧米のコレクターや博物館からの需要が急増したことが意匠の多様化を促した可能性がある．（臺浩亮）

【人形石灰彫像（kulap）】

・資料番号：6（男性像），7（女性像）
・サイズ（高さ×幅×奥行）:（6）35 × 10 × 8 cm（男性像），（7）36 × 9 × 7 cm（女性像）
・蒐集地：ニューアイルランド島南部

主に葬送儀礼用に製作使用されたもので，故人の肖像である．ただし，婚礼時の通過儀礼に用いられたこともあったと

人形石灰彫像
クラブ（7）

いう．各資料には年齢や性別，装飾にバリエーションがある．展示資料は男性像と女性像の２体で，後者は陰唇の形状から成人女性像と考えられる．発達した眼窩上隆起は現地の人々を彷彿させる．男性像にみる顔の輪郭や口の表現はウリ像に類似し，腹部の前で手を組む姿勢もウリ像のなかに類例を探すことができる．指や毛髪，腕輪や首飾りといった細部も表現され，褪色摩耗が進行しているものの，顔面や胴体は彩色されていたことが分かる．製作時の像には，いま以上に見るものを惹きつける力があったにちがいない．1930 年代以降は，「珍奇」な土産物として西欧からの旅行者を喜ばせたことが知られている．（福田彰寛）

【　槍　】

・資料番号：8（黒曜石製刃部付き），9（黒曜石製刃部付き），10（返し付き），11（返し付き），12（人骨付き），13（人骨付き），14（黒曜石製刃部付き）
・サイズ（長さ）：158 ～ 199 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

展示資料は 1.5 ～ 2m の槍だが，類例のなかには 4m を超える長槍もある．槍先は黒曜石製石刃と木柄（もくえ）を削りだした２種類がある．石刃には，アドミラルティ諸島産の黒曜石が用いられている．原石の自然面を残す石刃がある一方で，精緻な調整を施されたものもある．黒曜石製槍先を持つ資料は，概して装飾された着柄部をもつ．何重にも巻きつけられた組紐の上に樹脂を混ぜた白・赤・黒の顔料で幾何学文様を描き出したものや，浮彫文様を彩色した着柄部が多い．強度を犠牲にして，着柄部直下を彫り貫いて環状の意匠を造作した事例もある．

木製槍先にはエイの尾棘を返しに利用したものと，返しを持たないものに分けられる．上記の石刃槍に比べると実用性が高いように見える．返し付き槍の柄部は竹製で，その先端に槍先が差し込まれ，接合部は着色紐で縛られている．柄部は浮き彫りや規則的な着色によって装飾されている．類例には，先端部分にのみ返しを持つ単材製の槍もある．

下端にヒトの長管骨を装着する槍の柄部は，後端から先端に近づくにつれ太くなり，槍先にさしかかると再び細くなる．長管骨を刳り抜いて柄部を挿入し，接続部には貝製ビーズ紐が巻きつけられている．

（大内絢，女部田かなみ，小谷部優，西村奈緒，嶺岸かなえ）

【ダガー】

・資料番号：15（黒曜石製剣身付き）, 16（黒曜石製剣身付き）, 17（エイ尾棘製剣身付き）, 18（エイ尾棘製剣身付き）, 19（エイ尾棘製剣身付き）, 20（エイ尾棘製剣身付き）
・サイズ：26 ～ 52 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

剣身，着柄部，柄部の３部位から構成され，剣身は黒曜石製石刃とエイの尾棘製に分かれる．柄部は木製で，剣身と着柄部は樹脂製の膠着材で接合される．多くは着柄部に装飾を持ち，赤褐色を基調に白色・青色・黒色で意匠が描かれている．石刃はアドミラルティ諸島産の黒曜石を使用している．石刃先端部の細かな調整痕は，刃部形態の意識的な整形を物語る．着柄部には波線，鋸歯等の文様があり，柄部には交差文様が施されている．それぞれの文様は浮き彫りで表現され，凹部に白色顔料を塗り込み，凸部を青と黒で彩色している．エイの尾棘を刃部とするダガーは，貝製ビーズやガラス製ビーズで装飾されたものが多い．着柄部直下に人物像が彫り出された資料もある．（大内絢，女部田かなみ，小谷部優，西村奈緒，嶺岸かなえ）

【球状石頭付き棍棒・鳳梨状鉄頭付き棍棒・鳳梨状木製棍棒】

・資料番号：21（石頭付き棍棒）, 22（鉄頭付き棍棒）, 23（木製棍棒）
・サイズ（全長）：（21）70 cm, （22）73 cm, （23）114 cm
・蒐集地：ニューギニア東部 , ニューブリテン島

３本の棍棒は，それぞれ異なる素材で作られている．石頭棍棒は，木柄に巻かれた蔓植物の編物と膠着性の樹脂によって，柄にはめ込まれた石球が固定されている．おそらくパリナリウムの実から抽出する樹脂で，石頭が木柄から外れぬよう摩擦抵抗を上げるために貝殻片が混ぜ込まれている．

鉄頭棍棒の頭部は木柄にはめ込まれただけで，固定のために他の方法が併用された痕跡はない．鉄頭は等間隔に並ぶ 10 個の瘤状突起を円筒表面に４列もち，全体として鳳梨（パイナップル）様である．詳細は不明だが，何かを圧搾するための機械部品のように見える．石頭が球状や鳳梨状をなす棍棒はニューギニア東部の資料に類例を探すことができる．

木製有頭棍棒は，平面形状が菱形の瘤状突起を互い違いに重ねた鳳梨状頭部を有し，上記の鉄頭に良く似る．ただし棍棒上端が尖り，下端も石突き状に加工されている．全体が赤褐色に塗布されているが，瘤状突起の側面は塗られていない．刃物で削った製作痕が各所に見られ，粗雑な作りである．Tumuip という外来集団が

黒曜石製剣身付きダガー（15）, エイ尾棘製剣身付きダガー（17）

鳳梨状石頭を木製棍棒で模倣し，ニューブリテン島のガゼル半島にもたらしたと言われている．（黒沢愛子，王心歌，小川洵）

鰐形容器（25）

鮫寄せ漁具（26）

【鳥形容器・鰐形容器（kumeti）】

・資料番号：24（鳥形容器），25（鰐形容器）
・サイズ（縦×幅）：（24）44 × 11cm，（25）45 × 24cm
・蒐集地：ビスマルク群島

饗宴の際に用いられた木製の鉢である．材は重い．全体に黒く塗られ，刻まれた沈線をなぞる白い顔料が映える．鉢の持ち手部分を利用して，鳥とワニの姿が立体的に表現されている．鳥形の嘴は小魚を咥え，鉢の裏面にはワニが彫られている．ワニ形の鉢では，尾がオウムの嘴に姿を変えている．どちらの鉢も，持ち手の嘴が環状になるように加工されており，そこに通した紐で普段は吊り下げられていたようだ．メラネシアの社会には，特定の野生動植物や架空の動物を生命の源，あるいは一族の精霊と崇めるトーテム信仰が広く認められる．さまざまな鳥やワニも信仰対象である．（宮内智輝）

【鮫寄せ漁具】

・資料番号：26
・サイズ（直径）：36 cm
・蒐集地：ニューアイルランド島北部

オセアニアでも他に類例の少ない固有の漁法，「鮫招き」に用いられた道具である．ココナッツの殻の上端と下端がリング状に切り出され，環状に巻かれた籐に２個１組で向かい合うように通されている．籐は二重巻で，外れないよう蔓植物で固定されている．一巻に 10 組以上の殻が付けられ，打ち振るとそれらがぶつかり合ってカラカラと音を立てる．水中で鳴らすと，水鳥が小魚を襲う音と勘違いして，鮫が浮上してくると言う．その鮫を餌の魚でカヌーの近くにおびき寄せ，ロープで首を締め上げたのちに棍棒で仕留める．「鮫招き」

は日常的に行われるというよりも，成人儀礼と密接に結びつく漁で，女性や未婚の若い男性は参加できない．ニューアイルランド島には，創世神モロアによって同時に生み出された鮫と人間を対等の存在とする信仰がある．それゆえ，カヌーに寄ってくる鮫と自分は同じ氏族だとみなされる．（堀いづみ）

【カヌー用飾り板】

・資料番号：27, 28
・サイズ（全長）：（27）75 cm,（28）78 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

カヌーの船首•船尾に突き出すように取り付けられた装飾品である．木板を彫り抜き，赤•白•黒で彩色されている．多くの類例と同様に，飾り板全体は長楕円形を呈する．展示資料の彫刻意匠は魚だが，ビスマルク群島の類例には鰐や男性など他にもさまざまな種類が見出せる．一方の飾り板には，白色のウミウサギガイが２つ括りつけられている．マリンブルーの海を疾走するカヌーの先端で，浪切りの音に混じってウミウサギガイの突き合う音が聞こえてくるようだ．（堀いづみ）

【舞踏用手持ち棒】

・資料番号：29, 30
・サイズ（長さ×奥行×幅）：77 × 10 × 7 cm
・蒐集地：ニューブリテン島，あるいはその周辺の島

ニューブリテン島ガゼル半島の人びとは，人を模った飾り棒や飾り板を持って踊る集団舞踏を好むことで知られてきた．最下部に持ち手が付けられ，軽量材で作られた展示資料もその一種と考えられる．頭の上に載る三角錐状の飾りには，一対の同心円模様が描かれている．当該地域でドゥクドゥクと呼ばれる男性結社が，儀礼用の仮面に描いてきた意匠と同一である．顔の輪郭に沿って均等幅の細溝が刻まれており，そこに埋め込まれた植物繊維で顎鬚が表現されていた可能性がある．胴体は蛇のようにくねり，その下端に２本の足が付く．赤•黒•白で彩色されるが，一部に青色の顔料が用いられている．西欧の影響であろう．細部を見ると，貝片を用いた眼球には，赤色彩片を鉄釘で打ち付けて瞳が表現されている．（菊池百合子，北垣文菜）

【舞踏用手持ち板（mapinakulau）】

・資料番号：31, 32
・サイズ（長さ×幅×厚さ）：（31）78 × 14 × 2 cm,（32）65 × 15 × 1 cm
・蒐集地：ニューブリテン島ガゼル半島あるいは付近の島

舞踏用手持ち板（32）

軽量の薄板を彫り抜いて意匠が造形され，彩色も豊かである．持ち手の上には，鮮黄色の衣服をまとった西欧人の姿が表現されている．男女１対で，男性の服装は船員の制服に見える．19 世紀に入ると，航海者や商人，宣教師，学者が頻繁にこの地を訪れるようになり，なかには家族連れの滞在もあったことから，西欧人の夫婦を表象したと考えられる．男性人形の上には円錐形の胴部に腰蓑を付けた人形（ひとがた）が配されており，ドゥクドゥクを連想させる．ドゥクドゥクは当地の男性秘密結社と密接に結びつく儀礼で，女性の加入は許されない．女性人形の飾り板には同様の意匠がないことと関連があるかもしれない．類例の舞踏用手持ち板より小ぶりであり，西欧人を描く意匠の特異性を考えると，土産物か玩具として製作された可能性も浮かぶ．（藤澤綾乃）

【櫂状手持ち舞踏具（asok/hasok）】

・資料番号：33, 34
・サイズ（長さ）：（33）105 cm,（34）13 cm
・蒐集地：ニューブリテン島ガゼル半島セントジョージ水道

木柄の両端に，当地の生活に密接に関わる斧と櫂が表されている．斧の刃部は先端両面に調整がほどこされている．類例には鉄斧を装着した資料が認められる．記録によれば，実際に人を殺める際に鉄斧が使用されたこともあったという．櫂は鮮やかに彩色され，実に７色の顔料が認められる．特に西欧由来の青色や緑色が目を引く．儀礼用具に広く用いられる渦紋や多重円紋, 鋸歯紋の意匠が櫂部に彫られている．また一方の資料には，植物繊維を束ねた腰蓑状の意匠が柄の中ほどに付されており，ドゥクドゥクの儀礼を連想させる．（吉田友里恵）

【鼈甲細工付き貝製装飾品 (kapkap)】

・資料番号：35, 36, 37, 38, 39, 40, 41
・サイズ（直径）：6 ～ 18 cm（貝製ディスク）, 5 ～ 10 cm（鼈甲細工）
・蒐集地：ニューアイルランド島

シャコガイの貝殻から切り出して滑らかに研磨した白色円盤の上に，透かし彫りの鼈甲細工を重ね，植物繊維のより紐などで両者の中心を結びつけている．鼈甲はタイマイ製で，全体に均一な色合いになるよう，黒色あるいは暗褐色の顔料を表面に塗布した痕跡が認められる．細かな幾何学模様が同心円状に連

なる意匠が多く，基盤をなす貝製ディスクとのコントラストが美しい．もともとは，鯨歯や鮫歯，あるいは豚の歯牙で模様を切り抜いていたようだが，展示資料にみる緻密な加工には鉄製切削具が必要だったろう．胸飾りや髪飾り，頭飾りとして，儀礼の場で主に男性に着用された．「カプカプ」はニューアイルランド島北部のピジン語に由来する語彙で，「知識」という意味を持つ．当地では首長が亡くなると，そのカプカプも死ぬとみなされた．葬送儀礼の後に鼈甲細工は破棄され，貝製ディスクだけが新しい首長の鼈甲細工と組み合わされて継承された．同様の装飾品はメラネシアに広く分布し，北西はアドミラルティ諸島，南東はソロモン諸島まで類例を認めることができる．（長瀬健太•黒川由紀子）

鼈甲細工付き貝製装飾品 カプカプ（38）

【ナイフ形貝製装飾品】

・資料番号：42, 43, 44
・サイズ（長軸×短軸）：13.9 ～ 19.7 × 7.3 ～ 8.6cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

ウグイスガイ科二枚貝のシロチョウガイから作られた貝製装飾品である．表面はよく研磨され，真珠母貝特有の光沢を放つ．直線や菱形の装飾が表面全体にほどこされている．弓形をなす貝殻縁辺は鋭く研磨されており，一定間隔で鋸歯状の抉りが入る．同諸島の類例では，貝刃と報告されることが多い．日常的にはタロイモなど根茎類を切るために用いられたが，装飾が施された貝刃は舞踊の際に女性が身に付ける持ち物であった．諸島内のバルアン島では，高位者が使用したという報告がある．（長瀬健太）

【ビーズ製腕輪】

・資料番号：45
・サイズ（縦×直径）：8 × 9 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

主に女性の上腕や手首，あるいは足首に付けられた装飾品である．多くの場合，

複数組み合わせて使われた．赤・青・白のガラス製ビーズを編み込んで作った装飾を，筒状の樹皮の上下に縫い合わせている．幾何学的な意匠が規則的に連なってユニットを構成し，同様のユニットが筒の表面に沿って３回半繰り返えされている．ただし，ところどころに例外を認めることができる．たとえば，幾何学文様の線は交互に続く青と白のビーズから基本的に構成されるが，一部には赤色ビーズが使われている．類例は，アドミラルティ諸島のマヌス島やマンタコル島からの蒐集品に認められる．（川﨑咲登子）

【舞踏用装飾前垂れ】

・資料番号：46
・サイズ（縦×横）：70 × 40 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島

相撲の化粧廻しのように，儀礼的な舞踏に際して男性が着用した前垂れである．上部は植物繊維の織地にハトムギの種子が一列に織り込まれている．主体部には，織地の横糸に貝製ビーズを並べ連ねて白地を作り，ココナッツ殻の小片で作った黒褐色のビーズを間に挟むことによって十字や鰐形の意匠，矢状やジグザグ状の模様が描かれている．前垂れの最下部は，貝製ビーズを連ねた紐の先端にアカテツ科の高木グッタペルカの種が下げられている．類例のなかには，オウムの羽や犬の牙を用いた装飾前垂れや，赤と青のガラス製ビーズを用いた事例が認められる．舞踏やその他行事で女性が着用した前垂れや，女性の婚礼着の一部として用いられた類例もある．（川﨑咲登子）

【木製杖・籐製杖】

・資料番号：47（木製杖），48（籐製杖）
・サイズ（全長）：（47）100 cm，（48）99 cm
・蒐集地：ニューブリテン島ラバウル（？）

木製杖は握りから下端までまっすぐ伸びる直杖で，メラネシアで広く信仰される蛇２匹が柄に巻きつくように彫り出されている．頭部が逆三角形であることから，毒蛇の一種と考えられる．蛇の眼球や握りの上面にはシロチョウガイの螺鈿細工がほどこされている．面取りされた柄の上部にも，ＮとＨを模した螺鈿の意匠が縦に並ぶように各面に配されている．籐製杖は握りが弓なりに湾曲する一本杖である．握りには鋸歯状紋が刻まれ，柄には帯状の網目模様が 16 条ほど間隔を違えながら付けられている．また，柄の随所にアルファベットが線刻されている．そのなかには発音できる文字の組合せがあるが，文字の形を真似たような意匠もあり，単語としての意味をもっていたのか不明である．籐製杖には擦り切れや摩耗が多数認められ，かつて使用されていたことが分かる．小嶺コレクションには 31 本の杖が含まれているが，他機関の収蔵品に類例が見つからず，蒐集地や蒐集意図がはっきりしない．（土方康司・大姶良美里）

【木製割目太鼓】

・資料番号：49
・サイズ（長さ×胴部×柄部）：57 × 33 × 12 cm
・蒐集地：アドミラルティ諸島（？）

円柱状の丸太に割目（スリット）を入れ，刳り抜いて中空にした打楽器である．割目を挟んで片側は三角形を基調とする幾何学文様で装飾されている．赤褐色の顔料が全体に塗布され，胴部両端の縁，鰐を象る取っ手，幾何学文様は茶褐色と白の顔料で彩られている．反対側は無文で，鉄製の道具で削った製作痕と桴（ばち）で叩いた使用痕が観察できる．オセアニアの各地には，大小様々な割目太鼓がある．なかには全長 2m を超す事例もあるが，小嶺資料の割目太鼓は小型の部類に属する．儀礼において楽器として使われるほか，特定のリズムを刻むことによって，離れた相手とのコミュニケーションにも使用される．（大姶良美里）

木製割目太鼓（49）

【西欧からもたらされた青色顔料】

ビスマルク 群島の島々では，伝統的に赤（赤褐色）•黄•白•黒の顔料が造形物の彩色に用いられてきた．しかし，儀礼用具やダガーといった展示資料のなかには，青色や緑色の使用が認められる．これらは，西欧との接触後に入ってきた顔料である．ニューアイルランド島では，1880 年代に入ると青色顔料（Reckitts Blue もしくは Berliner Waschblau）が用いられ始めていた．オーストラリアのクイーンズランドを拠点に労働者の斡旋業を営んでいた西欧人がもたらしたという．ドイツ植民地期にも使用されていたが，1890 年代にはあまり使用されなくなった．（臺浩亮）

【メラネシア民族資料整理作業参加有志（敬称略）】

下田健太郎，小林竜太，佐山のの，小林真衣子，黒川由紀子，臺浩亮

【ご協力（敬称略）】

倉持隆（慶應義塾大学三田メディアセンター），本田智治（慶應義塾大学三田管財部），
江添誠（文学部民族学考古学），後藤文子（文学部美学美術史），
倉田敬子（文学部図書館・情報学），那波市郎（株式会社 四門）

【民族学考古学研究法ＴＡ】

下田健太郎，平澤悠，島﨑達也

【展示作業参加者（2014 年度・民族学考古学研究法受講者）】

王心歌，大始良美里，大内絢，小川洵，女部田かなみ，小谷部優，川﨑咲登子，
菊池百合子，北垣文菜，黒沢愛子，中島舞，西村奈緒，長瀬健太，土方康司，
福田彰寛，藤澤綾乃，船橋卓真，堀いづみ，嶺岸かなえ，宮内智輝，吉田友里恵

【民族学考古学研究法担当教員】

安藤広道，佐藤孝雄，山口徹，渡辺丈彦

『語り出す南洋の造形：慶應大所蔵・小嶺磯吉コレクション』
2015 年 1 月 9 日　印刷

監修：山口徹
編集：山口徹，安藤広道，佐藤孝雄，渡辺丈彦
発行：慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
〒 108-8345
東京都港区三田 2-15-45
PHONE: 03-3453-4511